

## 第 107 話〈大洋丸撃沈〉の要約と参考資料

### 第 107 話〈大洋丸撃沈〉の要約

海軍の真珠湾奇襲に合わせて陸軍はマレー半島に上陸し、シンガポールめざして南進する途中で、マレー半島のスズ鉱を占領しました。元土呂久鉱山労働者もスズ鉱収奪に送り込まれ、輸送船が撃沈されたり、精錬所で現地武装集団に襲われたりして、命を落としました。

### 第 107 話〈大洋丸撃沈〉の参考資料

#### 107-1 東岸寺選鉱場の火災

大崎袈裟蔵さんの話（聴取時期不明）

選鉱場が焼けてからいかんごとになった。選鉱場の上から 3 段目から上が焼けて、喉首が焼けて鉱石がおりんごとになった。そして閉山になった。選鉱場の整理、機械の梱包とかに 2 年くらいかかった。土呂久でも残務整理があるし――。

佐藤シズ子さんの話（1979 年 4 月 20 日聴取）

夜、火事になった。ボールミルへんが焼けた。ほんの少しだが、選鉱場では大事な場所。これで、鉱山はやまった。

米田嵩さんの話（1979 年 4 月 21 日聴取）

焼けるときはかけつけた。下から何段目かに火がついて、それから上はずっと焼けた。建屋は建っちゃった。中だけ焼けた。それでぐらぐらしたんでしょう。やめた。鉄塔はほとんど戦争中にとってのけた。鉄が必要だったからでしょう。

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」P193~194

ザザードーン。ものすげえ音で、南組の衆は目を覚ました。東岸寺選鉱場の火災で、索道のワイヤロープが切れたんじゃ。落てたワイヤは「川端」の物置きの屋根をずって、「新屋」の上の岩にかかった。索道にさがった空の搬器 50 個も、みな落ててしもた。20 貫もある搬器じゃき、人家に落ちれば大事がでくるところじゃった。岩戸鉱山は火事跡を片付けただけで、どうしたわけか復旧工事にかかろうとはせざったそのまま「選鉱場消失により休山する」と発表した。千島の金山に派遣されておった松尾一男が呼び戻されち、神崎三郎に代る 3 代目土呂久鉱業所長に就任した。採鉱は中止。従業員たちの職探しが始まった。今と違って、退職金はねえわの。会社の世話で、槇峰鉱山、尾平鉱山、大口金山に再就職するものがある。相次ぐ応召で人手不足になった鉱山から募集がくると、それに応じ

て移っていく者がおる。残った者の手で、索道のワイヤや坑内のレール、坑外の機械の撤収など残務整理が始まった。江戸時代初めの山弥時代、幕末の内藤藩直営時代、それに続く3度目の繁栄を築いた岩戸鉱山時代は、実にあっけない幕切れじゃった。

たいした火災でもねえのに、中島財閥は東岸寺選鉱場、土呂久鉱山、中野内鉱山をあっさり諦めた。土呂久人衆には、どうか納得でけざった。5年前の索道完成祝いの席で、「驚くなかれ、中野内から東岸寺までの索道建設に1千万円かけた」と聞かされた。そのもともとらんづく休山とは。祖母山の下へ抜く惣見通洞も、途中まで掘って断念ちゅうことになる。その変わり身の早さにたまがった。

## 107-2 戦争で需要が増えた錫

### 東亜研究所「支那に於ける錫の生産と流動」

錫は古代から知られた金属で、青銅時代には銅と混じて武器其他の器具に用いられた。錫鉱（含有錫分約1.5%以上）、錫石、砂錫として産出する。精錬された錫は銀白色で展性に富み、柔軟で232度に於て溶解する。他の金属を加へて合金とし硬くすることが出来、空気中に於ても錆びないのが特色である。鑄物として茶器、樂器の管等に用ひられ、自動車の部分品としては一車輛中5、6封度の錫を要する。其他器具、鉄板に塗って鍍力板とする。この鍍力用としては、1937年に於ける世界消費量は約8万トン、全世界錫消費量の約40%に達している。其他ハンダ蠟、及びベアリング用のバビット金、ブロンズ箔、摺込用のチューブ、化学品等に用いられる。支那では宗教上の信仰から冥錢と称するところの錫箔を塗布した紙箔を以て元寶等の形を造り、寺廟で焼き神仏及祖先の靈を慰めるに供する。

軍需品としての錫は平時に於けるよりも甚だ重要であり、前述の自動車用としては勿論、缶詰食料用の錫板、機械用のハンダ及びバビット金の需要は更に増加する。特に少量ではあるが、重要なものに四塩化錫があり、これに必要な錫の量は極めて少量で、1917年アメリカ軍需局がこの用途に供した錫は500トン足らずであった。

### 小山一郎著「日本の鉱山」

わが国のスズは僅少鉱物である。辛うじて兵庫県の明延鉱山はわが国の主なる鉱山である。(略)しかし昭和17年には南方の勘定地域(マレー、バンカ島)から大量に輸入されたので、内地の錫は不要となり、急に減じて昭和22年にはたった55tになったが、昭和29年には886tになっている。世界錫生産は1953年に178,800tである。

### 小宮高樹さんの話(1977年3月5日聴取)

その後、錫統制令(昭和16年ごろ)が出て、錫鉱区を国家が買い上げる。これが、帝国鉱業開発で、本社の人間も半分近くひきとられた。

### 107-3 インドネシアと錫

小宮高樹さんの話（1977年3月5日聴取）

太平洋戦争の緒戦を日本が勝って、インドネシアへ攻め入った。ここは世界の60～70%の錫の産地、川砂、海砂から選鉱する砂錫で、この採掘をオランダ軍が逃げたあと、元中島鉱山の人間（当時は帝国鉱業開発）がやることになった。小宮新八も行く予定だったが、先発隊の船が撃沈されたため行けなくなった。

佐藤数夫さんの話（1977年3月5日聴取）

その船で野方野の職頭が死んだ。それ以前に行った人もいる。島田勇とか増田正秀とか。島田は戦後帰ってきて、生存しとるかもしれん。（\*2人とも生存して帰り、その後増田は死亡）

小宮高樹さんの話（1977年8月15日聴取）

昭和18年ごろ、鉱山事務所で経理をしていた島田、増田がインドネシアへ行った。

### 107-43 ペナン製錬所

シンガポール攻略作戦略歴

1941（昭和16）年12月1日	第5師団海南島着
12月4日	海南島出発
12月8日	午後4時過ぎ、英領マレー・シンゴラ上陸 コタバル敵前上陸→飛行場占拠
1942（昭和17）年1月11日	クアラルンプールに進入
1月31日	ジョホール・バルに進入
2月15日	イギリス極東軍のマラヤ司令部・司令官バーシバル中 将無条件降伏

東洋鉱山株式会社「殉職記念帳」より

東洋鉱山社長小野義夫「祭葬料伝達挨拶」

顧レバ昨年（昭和17年）3月29日陸軍省ヨリ馬來彼南製錬所ノ管理経営並ニ附近錫  
鉱山ノ開発ヲ拝命シマシテ直ニ開発部隊ノ編成ニ着手致シマシタ処……

福田要「南方資源経済論」P713より

（錫製錬）は採鉱と経営上区分され少量の錫鉱は地方支那人精製所で処理されるが、大

部分は昭南及ペナン精錬所で行はれていた。昭南のは元海峡商事株式会社経営年産能力 6 万噸、ペナンは元東方製錬会社経営 3 万噸である。共に旧英国系会社で世界一の能力を有してゐる。外に小規模の支那人経営の萬福興司、タン・バン・ジュー会社（聯邦州）所有がある。然し日本政府の統制により復旧は年内に行はれる見込である。戦前前記 2 箇所は馬來産錫鉱のみならずタイ、ビルマ、仏印、南何聯邦、ウガンダ、タンガンイ及日本等の鉱石も輸入製錬してゐた。今後当分は東亜県内の産のみに限られるのである。

#### 107-5 太洋丸撃沈

東洋鉱山株式会社「殉職記念帳」より

大東亜戦争勃発、馬來半島席捲

大東亜戦争勃発以来、皇軍ノ電撃作戦ハ陸ニ海ニ赫々タル戦果ヲ挙ゲ、50 余日ニシテ全馬來半島ヲ席卷シ、同地域ニ於ケル經濟建設並ニ資源開發ガ硝煙籠ムル裡ニ着々進行サレタノデアアル。此ノ秋、我ガ社ハ過去ニ於ケル錫鉱業ノ功績ヲ認メラレ、陸軍大臣ヨリ敵産彼南錫製錬所ノ經營並ニ馬來半島内ニ於ケル錫鉱山開發ノ事業ノ担当ノ命ヲ承ケタノデアッタ。(略)

取締役新井友蔵君等 82 名ハ、其ノ第 1 次派遣隊トシテ昭和 17 年 5 月 5 日、軍用船〇〇丸ニ搭乗勇躍任地ニ進發シタノデアアル。

然ルニ何タル不幸ゾヤ、出帆間モ無キ 5 月 8 日夕刻、〇〇丸ハ敵潜水艦ノ襲撃ヲ受ケテ沈没スルニ至リ、吾ガ派遣隊員 52 名ハ遂ニ船ト運命ヲ共ニシ或ハ行方不明トナッタ。

[陸海軍省発表] (14 日午後 6 時)

南方占領地の經濟關係者乗船中の〇〇丸は海軍船艇護衛の下に航行中 5 月 8 日夜東支那海において敵潜水艦の魚雷攻撃を受け沈没せり、魚雷命中と共に本船は大火災を發したると海上波浪高く加ふるに暗夜たりしたため、避難救助共に困難を極め遂に多数の犠牲者を出せり、現在までに判明せる生存者は 541 名なり、因に敵潜水艦に対しては海軍部隊直ちに反撃を加へ、これを沈没せしめたること概ね確實なり。

佐藤仲治さんの話 (1979 年 4 月 15 日聴取)

野方野の職頭の甲斐仁、甲斐巖がインドネシアに船に乗っていきよって撃沈された。魚雷におうたもんじゃろうと思う。見立に行つちよってから、土呂久鉱山が盛んになって岩戸に帰ってこらした。

甲斐イキエさんの話 (1979 年 4 月 20 日聴取)

(錫でできた花瓶 [大洋丸遭難殉職 13 回忌 東洋鉱山株式会社 昭和 29 年 5 月 8 日] が置いてあった)

夫の甲斐巖は丑年、明治 41 年生。死んだのは 37 歳。東洋鉦山の見立鉦山に 10 年くらいおって、それから土呂久の東岸寺選鉦場に移った。見立でも選鉦。坑内には入らんかった。南方に派遣され、シンガポールの北のペナンに行く途中、東シナ海で米軍の魚雷を受けて沈没、死体は済州島の東の突端にあがった。

17 年の 5 月の初め野方野を出発、別府で鯛生金山の者と一緒になって送別会。東京本社から来た人と大送別会をした。死んだのは 5 月 8 日。

土呂久が閉山になって、木浦に回されるようになっていたが、「木浦は便利が悪いから」と言いよった。兄さんが岩戸の信用組合に勤めちよった。「事務員が足らるので、信用組合に勤めろ」と言われて、木浦はやめて信用組合に出よったところが、見立鉦山から電話がかかってきて、「南方に行こう」。弟の甲斐仁さんが見立におって、仁さんは行くという。私は反対した。「見立に来いという話やが、話聞いたら行かなならんごつなるから」と反対した。ところが、一晩で帰ってきて「行くごつした」。仁が先で、うちがあとに行く予定だったが、「いっしょに行け」ちいうごとなった。最初の船に乗り込んでいったら、魚雷を受けて、鉦山関係者だけで 82 人行って 52 人死んだ。30 人助かった。

太洋丸という船で広島から出発した。ペナンという占領したところに錫の鉦山がある。軒下みたいなところから、えらい上鉦（じょうこう）が出るということで、日本の錫だけでは戦争の武器に足りない。

台湾の沖が見えるようになって、駆逐艦が護衛していたが、「ここまで来たら世話ないじゃろう」と帰ったあと、魚雷を受けた。そのときが遭難になった最初。船首が魚雷を受けて、筏やらゴムボートに乗る者もおったり、海に飛び込む者もおったり、泳ぎよるうちに助けられたときは、油が浮いて顔が汚れて誰が誰かわからん。30 何名か長崎に帰った。新井友蔵が運送指揮で行った。「助かった 30 何人が涙の再会をしたが、その他の人は海の藻屑となったと思うちくれ」。弟（甲斐仁）は 3 日目に遺骨になって帰ってきた。私とこ（甲斐巖）はわからんで、門司、長崎へん捜してもわからん。21 日ぶり済州島の東突端にあがった。刺青と岩戸神社のお守りでわかった。軍属同様に取り扱いもらい、慰霊祭も毎年行われ、社長から、どこそこのお寺で供養されると連絡きたが、今は鉦山から何もこない。

そのとき無事に帰ってきた人は、第 2 回目で行った。こんなんで帰ったあとも、また、どうあっても続けていく。2 回目無事に着いて、ペナンで鉦山を始めた。匪賊が出て、事務所の人たちはみんな逃げて、逃げのびん人が殺されて、2 度遺骨が帰ってきた。遺骨じゃなくて、小さい箱に入った髪と爪だけの遺骨。高千穂の人だった。

## 107-6 海底に沈んだ大洋丸発見

朝日新聞夕刊 2018 年 9 月 5 日

撃沈の徴用戦 海底で発見 / 戦前は白洲次郎も乗船、東シナ海で

戦前は客船として活躍し、第 2 次世界大戦中、米潜水艦に撃沈された大型商船「大洋

丸」(約1万4千トン)が、[東シナ海](#)の海底で発見された。調査したラ・プロンジェ深海工学会が5日、水中ビデオの映像や詳細な位置を公表した。

大洋丸は1911年に建造され、サンフランシスコ航路などに就航し、ロサンゼルス五輪(32年)に出場する選手団や、実業家の白洲次郎(1902~85)も乗船した。第2次大戦が始まると「戦時徴用船」として、補給や兵員の輸送を担った。42年5月、広島から[フィリピン](#)に向けて航行中、[東シナ海](#)で米潜水艦による雷撃で沈没し、民間人と軍人計817人が亡くなった。

浦環(うらたまき)・九州工業大特別教授らの研究チームは8月末、海底データを元に、無人潜水機を使って周辺を調査。[鹿児島県](#)・[屋久島](#)の西約250キロの海底で大洋丸を発見した。船首以外は形状が残っており、左舷を下にして水深約130メートルに沈んでいた。記録に残る船体の写真とも特徴が一致した。

浦さんは「沈没した船のほとんどは所在が不明のまま。海の底に忘れられた歴史を掘り起こしたい」と話している。(石倉鉄也)

#### 107-7 マレー半島の資源略奪

川原一之著「口伝 亜砒焼き谷」p194~P196より

「帝国陸海軍は本8日未明西太平洋に於て米英軍と戦闘状態に入れり」

岩戸鉱山が休山を宣言して間なしの昭和16年12月8日、ラジオは大本營の発表を伝えた。海軍はハワイの真珠湾を奇襲攻撃。陸軍はマレー半島のシンゴラへ上陸し、シンガポール攻略作戦を開始した。大東亜戦争の始まりじゃ。

マレーは世界一の錫の産地として知られとる。品位6,70パーセントの砂錫が、露天掘などでいくらでもとれた。ペナン島には、イギリス系の東方製錬会社が建てた世界有数の錫製錬所があった。年産3万トンでの。岩戸鉱山の土々呂製錬所の500倍の生産量になる。日本軍が半島を南進し、シンガポールを陥落させたとは上陸70日目の17年2月15日。イギリスのアジア支配の拠点があくずれ、マレー半島の資源を日本が奪いとった。首相の東条英機は兼任しておる陸軍大臣名で3月29日、東洋鉱山社長の小野義夫に命令を下した。「過去における錫鉱業の功績を認め、ペナン製錬所の管理運営ならびにマレー半島内の錫鉱山開発の担当を命ず」ちゅう内容での。土呂久から東へ2里半の所に、日本1,2の錫鉱山の見立がある。東洋鉱山はその見立鉱山を經營する会社じゃ。

野方野の甲斐巖さんは見立鉱山で10年間選鉱したあと、東岸寺選鉱場の職頭をつとめた。休山になって岩戸の信用金庫に出よるとき、見立におる弟の仁さんから電話をもろた。「俺と一緒に南方へ行かんかい」。巖さんなその話に乗った。巖さん兄弟を含む82人で、第1次マレー派遣隊が編成された。隊員は、関連会社の鯛生金山からも集められての。広島の宇品港で軍用船大洋丸に乗り込み、5月5日に出帆した。壮行式で新井友蔵隊長は「われわれ産業人が經濟建設の決戦場に動員されましたことを無上の光栄と感じます」

と挨拶した。

太洋丸は東シナ海を南下、5月8日夕刻台湾沖に近づいた。それまで護衛した駆逐艦が引揚げた直後、アメリカの潜水艦から魚雷を受けた。船首に命中して炎上、1時間後に沈没してしもた。隊員は筏やボートで脱出したが、波が高うてよ。30人が救助されただけで、52人は海のもくずと消えた。仁さんは3日目に遺骨になって遺族のもとへ。巖さんの遺体は21日ぶりに、濟州島の東の突端に打上げられた。刺青と天岩戸神社のお守りから、身元が確認できたげな。

東洋鋳山はペナンへ第2次、第3次と派遣隊を送り込み、精製した大量の錫を内地へ輸送した。岩戸鋳山の職員はインドネシアの錫鋳山へ派遣されたりした。東南アジアはこうして、日本の錫供給地になっていった。そん代り国内の錫生産は急激に落ちて込んで、やがて錫鋳業の整備が実施される。中島はこの事態を早よから見通しておったとみゆる。あっさり亜砒焼きをやめたのも、土呂久鋳山に見切りをつけたからじゃなかったかの。選鋳場の火災は、土呂久を捨てるちょうどいい口実に使われたごたる。